

．基本科目の特徴と履修

1．基本科目の特徴

基本科目には、問題発見能力、問題解決能力、そして伝達能力や表現能力を養成するのに必要な授業科目が配置されており、それらは基礎科目、外国語科目、健康科学科目の3つの授業科目区分のもとにまとめられている。

基礎科目にまとめられている授業科目は、問題探索とその解決能力、および伝達能力の高度化に向けて必要な基礎学力および応用力を養成する授業科目が配置されている。外国語科目には、異なる文化や異なる言語に基づく独自の発想や思考法を知るとともに、自分の考えや意思を異なる文化的・社会的背景をもった人々に伝達するための手段としての外国語を学修する授業科目が配置されている。健康科学科目には、各種の運動機能とその働きから自己の能力をとらえ直していくための授業科目が配置されている。

2．基礎科目の特徴と履修

自分で問題を発見し、考察し、解決するのに必要となる認識能力を高めるための授業科目や、またその過程で、あるいはその結果として必要となる各種の表現技法について学ぶ授業科目が配置されている。また、大学で学ぶ学問内容が学生諸君の将来設計とどのような関係にあるかを考えるための入門科目が配置されている。以下、それぞれの配置科目について、簡単に紹介しておこう。

「F Y S（基礎演習）」は、大学での学び方一般について、基礎的なレベルからの教示と指導が、少人数教育のもとで個々の学生に対してなされる。大学生活の最初はとくに重要な時期であるために、全学部で1年次前学期に、しかも必修科目として、全員に科目の履修が義務づけられている。経営学部では1993年度より基礎演習という初年度ゼミを実施しているが、2006年度よりF Y S（基礎演習）という名称に変更した。

F Y S（First Year Seminar）科目について

F Y Sは全学共通の初年次教育科目（必修）です。F Y Sとは、ファースト・イヤー・セミナー（First Year Seminar）の略で、新入学生（1年次生）は少人数のクラスに分かれ、“大学への入門”をセミナー（演習）形式で学びます。本学では、このF Y Sを通して新入学生が大学での学修により早く適応できるようにサポートします。

新入学生のみなさんは、この科目の履修を通して「読み、書き、調べ、問題を発見し、自分の考えを発表し討論でき、自分の責任のもとで行動できる」大学生としての資質を身につけ、積極的に学修に取り組む姿勢を修得してください。

具体的には、以下のような能力を身につけた学生の育成をめざします。

- （１） 大学で学ぶことの意味を理解し、自分を客観視することができる。
- （２） 教育課程を理解し、4年間の学修計画をたてることができる。
- （３） 学内の施設を知り、また学修支援システムを自立的、継続的、多面的に利用できる。
- （４） 図書館の利用により、独自に文献や資料等を検索または収集できる。
- （５） 既存の文書を指示された要件に従って要約し再構成でき、またレポートや小論文を所定の期限までに完成できる。
- （６） 事象や既存の理論に対して「問題」を発見し、また疑問を提示することができる。
- （７） これらの能力を応用して、付加価値の高いノートが作れ、また完成度の高いレポートや小論文を作成できる。
- （８） グループ学習に際しては、協調性をもって主体的に参画することができ、また意見を述べることができる。
- （９） プレゼンテーションに際しては、自ら資料を作成し、論点を整理し、所要時間内に口頭発表ができる。
- （10） 自らの能力を自己評価でき、新たな達成目標を設定することができる。

授業回数は、前学期（半期）15回とし、おおむね以下のような内容と順序で行われます。これにより、大学生に求められる一般常識や態度と、大学で学ぶための基礎的技法をバランスよく学びます。

1 年 次 ・ 第 1 セ メ ス タ ー	第1週目	第 編 大学生に求められる一般常識や態度を身につける	第1章 大学で学ぶことの意味を理解する - 自ら積極的、主体的に取り組む -
	第2週目		第2章 大学で学ぶことの意味を理解する - 疑問を抱き、「問題の所在」を発見する -
	第3週目		第3章 大学で学ぶことの意味を理解する - 神大の歴史・沿革を学び、大学生としてのモラルを理解する -

1 年 次 ・ 第1 セメ スタ ー	第4週目	第 編 大学で学ぶための基礎的技法を身につける	第4章 授業への取り組み - 自分にとって役立つノート -
	第5週目		第5章 授業への取り組み - 文献資料（図書，新聞，雑誌など）を読む -
	第6週目		第6章 授業への取り組み - 情報探索と問題発見 図書館利用ガイダンス -
	第7週目		第7章 授業への取り組み - 情報探索と問題発見 情報活用能力を身につける -
	第8週目		第8章 授業への取り組み - 問題発見から問題の解決に向けて仮説を設定し，検証する -
	第9週目		第9章 授業への取り組み - レポートや小論文の作成 -
	第10週目		第10章 授業への取り組み - レポートや小論文の検証 -
	第11週目	第 編 大学で学ぶための視点と方法を身につける	第11章 プレゼンテーションを準備する - 意義と目的 -
	第12週目		第12章 プレゼンテーションを準備する - テーマ設定とレジюме作成 -
	第13週目		第13章 プレゼンテーションを実施する - 自分の考えを人前で話す -
	第14週目		第14章 プレゼンテーションを実施する - 相互に評価・批評をする -
	第15週目		第15章 まとめ - F Y S で学んだことと，これから大学で学んでいくべきことを話し合う -

各回の具体的な授業内容は、『F Y S 資料&ワークシート集 - 大学で学ぶための視点と方法を身につける - 』に記載してあります。

成績評価は，授業に参加する姿勢30%，小テストまたはレポート等の内容30%，プレゼンテーション等の内容40%として行います。

「基礎演習」は、1年次前学期の「FYS（基礎演習）」で養った大学での学び方の基礎に立って、問題の発見、探索、解決および伝達といった一連の作業を行い、実践的な問題解決能力の向上を目指す。「FYS（基礎演習）」と同様、少人数教育のもと演習形式で行われ、1年次後学期の必修科目として全学生に科目履修が義務づけられている。

「文章表現法」は、自分の考えを文章によって他人に伝達するための、基本的なルールの修得を目的としている。1年次前学期の選択科目として、次の「速読法入門」との選択で履修が可能である。

「速読法入門」は、各種印刷物の読解および講演・講義内容の筆記にかかわる、基本的な技法を修得することを目的としている。1年次前学期の選択必修科目として、「文章表現法」との選択で履修が可能である。

「キャリア形成論」は、将来の希望職業を早期に探索する重要性を認識することから出発し、その希望を実現するためには大学でどのような科目を体系的に履修したらよいかを学生諸君に考えてもらうための科目である。1年次後学期の選択必修科目として、次の「リーダーシップ論」との選択で履修が可能である。

「リーダーシップ論」は、他の人との共同で事を成就するために必要な交渉・説得・動機付けがもつ重要性を認識し、そのための基礎的な内容を修得することを目的としている。1年次後学期の選択必修科目として、「キャリア形成論」との選択で履修が可能である。

以上の6科目は、諸君の考える力、判断する力、伝達する力を養う科目としてとりわけ重要なものである。相互に関連する領域を有するため、それぞれの科目がとくにどの面の力を養うことに重点を置いているのかを整理して示せば図表3のとおりである。「知る」に関する3つの力および「表現する」に関する3つの力を総合することによって、ものごとの本質を考える力、的確に判断する力、説得性をもって伝える力が養成される。

<図表3 考える力、判断する力、伝える力を養う科目>

科目	知 る 力			表 現 す る 力		
	探す力	読む力	聞く力	話す力	書く力	伝える力
FYS(基礎演習)	○					○
基礎演習		○				
文章表現法		○				
速読法入門					○	
キャリア形成論						○
リーダーシップ論			○			

は主として取り扱う内容

3. 外国語科目の特徴と履修

(1) 外国語科目の履修方法および進級要件・卒業要件単位数

外国語の運用能力は、現代社会を生き抜く国際人に要求される素養のなかでも、もっとも基本的で不可欠なものである。経営学部では、外国語科目を基本科目として位置づけ、8つの言語〔英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語（2010年度以前入学者は「朝鮮語」）、日本語（留学生向け）〕の科目を設けている。その中から、すべての学生が自らの学修の関心に応じ、1つ以上の外国語を選択し、そのうちの1外国語科目については8単位を「卒業要件単位数」として必ず履修しなければならない。

複数の外国語を履修することや、選択した外国語に関して8単位を超えて履修することは自由であり、そのようにして取得した単位は、専攻科目の選択科目の卒業要件単位数に算入することができる。

〔履修方法について〕

日本語を母語とする者は、日本語を除く7外国語の科目から、1年次前学期に4単位以上および1年次後学期に4単位以上、履修することが望まれる。

日本語以外の言語を母語とする者は、日本語を1年次前学期に4単位および1年次後学期に4単位、履修しなければならず、さらに母語以外の外国語科目も履修することができる。ただし、能力検定試験等で一定の水準以上の日本語能力を有すると認められた場合は、母語および日本語以外の外国語科目を履修することができる。この履修方法は、外国人留学生および外国高等学校在学経験者（帰国生徒等）に適用される。

〔「卒業要件単位数」の8単位について〕

どのように外国語を選択しても、最低1つの言語で8単位を修得しなければ卒業できない。2つ以上の言語にまたがって修得した単位の合計が8単位であっても、「卒業要件単位数」を充足したとはみなされない。

〔3年次への「進級要件」に関わる単位数について〕

2年次から3年次への「進級要件」に含まれる「基本科目18単位以上」を充足するためには、複数言語で8単位以上であっても構わない。

「進級要件」・「卒業要件」単位数を充足するための1年次配当の外国語科目は、図表4のとおりである。

< 図表4 1年次配当の外国語科目 >

科目区分	授業科目	配当学期	単 位	卒業要件単位数
選択必修	基礎英語 ・	前	4	4
	初級英語 ・	前	4	
	中級英語 ・	前	4	
	上級英語 ・	前	4	
	基礎英語 ・	後	4	4
	初級英語 ・	後	4	
	中級英語 ・	後	4	
	上級英語 ・	後	4	
	ドイツ語 ・	前	4	4
	ドイツ語 ・	後	4	4
	フランス語 ・	前	4	4
	フランス語 ・	後	4	4
	スペイン語 ・	前	4	4
	スペイン語 ・	後	4	4
	ロシア語 ・	前	4	4
	ロシア語 ・	後	4	4
	中国語 ・	前	4	4
	中国語 ・	後	4	4
	韓国語 ・	前	4	4
	韓国語 ・	後	4	4
	日本語 ・	前	4	4
	日本語 ・	後	4	4
				計 8単位

注1：英語については、プレイスメントテストの結果にもとづき、「基礎英語」、「初級英語」、「中級英語」、「上級英語」のいずれかの履修科目が指定される。

注2：ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語の場合は、半期ずれて後学期に開講される ・ および前学期に開講される 、 もある。

注3：2011年度入学者から、従来の「朝鮮語」科目を「韓国語」科目に名称変更した。

いずれの外国語でも前学期と後学期にそれぞれ4単位ずつ履修することが望ましく、その4単位の内訳は週2回開講の科目に対して2単位ずつ与えられる。例えば、ドイツ語を選択した学生は、通常であれば前学期に「ドイツ語（週2回2単位）」と「ドイツ語（週2回2単位）」を履修し、後学期には「ドイツ語（週2回2単位）」と「ドイツ語（週2回2単位）」を履修することになる。それぞれの科目は週2回の講義で構成されているので、学生諸君は、1年次において前学期・後学期とも、最低週4回の外国語の授業を受講することが望ましい。

また、日本語を除く7外国語には、2年次配当の上級外国語科目（例えば、英語では「選択英語(上級)」）が設けられている。これらの科目は、英語では「卒業要件単位数」の8単位、英語以外ではそのうち6単位を充足した上で、さらに外国語の学習を続けることを希望する諸君のために設けられている。これら上級外国語 ・ ・ ・ はそれぞれ週1回授業の1単位科目であり、この中から好きな科目を必要なだけ履修することができる（ただし、「選択英語(上級)」の一部であるTOEFL対策の授業を受講するためには特別な条件が設けられているので注意すること）。

2年次配当の「SA外国語」(SA: Study Abroadの意味)および「特習外国語 ～ 」は、半年以上の中・長期留学をする学生のみが修得できる科目である。「SA外国語」は留学の事前指導、「特習外国語」は留学先で修得した語学等の単位を、本学の単位として認定するための科目である。

ここまでは、主に、どの外国語にも共通の特徴を述べてきた。以下では、選択する外国語によって履修の仕方が異なる点や特別な制限のある個別の特徴について述べる。

(2) 各外国語履修の特徴と注意事項

A) 英語を履修する場合

英語は、多くの学生諸君が既に6年間以上学習してきた言語であり、海外経験の有無などをも考慮すると、各学生の必要とする教育内容にはかなりの幅がある。経営学部には、各学生の関心と能力にできるだけきめ細かに対応した授業を行うために、**習熟度別**の英語科目を設置している。英語を選択する学生は、前学期・後学期それぞれの学期に

むけて行われるプレイスメントテストを受験し、その結果にもとづき、「基礎英語」、「初級英語」、「中級英語」、「上級英語」のいずれかの授業科目が各自の履修可能な科目として指定される。従って、プレイスメントテストの受験が履修の条件である。(図表5参照)英語を選択する諸君は、まずオリエンテーション期間の指定された日時にプレイスメントテストを受験する。後日、その成績により履修すべき授業科目と所属すべきクラスが発表される。(例:「上級英語 a」や「中級英語 e」のように、各レベル内のクラスが学籍番号と共に示される。)諸君は、自分の指定されたクラスと担当教員を確認して最初の授業に出席した後に、履修登録を行う。プレイスメントテストを受験せず、クラス指定を受けないまま履修登録をしても、正規の履修登録とは認められない。仮に、履修を希望するにもかかわらず、プレイスメントテストを受験できない正当な理由のある場合は、速やかに教務課へ相談すること。

習熟度別の授業科目を設置するのは、学生諸君が常に習熟度のより高い授業科目へと飛躍する意欲をもって、自分の着実な進歩を意識しながら学習に励んでもらいたいからである。次の例に示すように、諸君の履修する英語科目は、プレイスメントテストの結果により前学期と後学期で変化する可能性がある。

ある学生Sが、入学時のプレイスメントテストで「中級英語」に相当する得点を取った場合、Sは1年次前学期に「中級英語 (週2回・2単位)」と「中級英語 (週2回・2単位)」を受講し、英語の授業は合計週4回で4単位分受講することになる。Sは1年前学期の終わりに再度プレイスメントテストを受け、その得点に対応する授業科目を後学期に履修する。前学期と同じ習熟度の授業科目(この場合、「中級英語」)の・を履修する場合もあるし、前学期より習熟度の高い科目(この場合、「上級英語」)の・を履修する場合もある。反対に、前学期より習熟度の低い科目(この場合、「初級英語」または「基礎英語」)の・を履修することになる場合もある。

1年次で、「卒業要件単位数」の8単位はすべて修得できるが、2年次以降も英語科目(基礎・初級・中級・上級英語Ⅰ～)をさらに履修する学生は、決められた日時(掲示板等で通知する)に再度プレイスメントテストを受験し、その成績が1年次に既に履修済みの科目より高い習熟度の科目に相当する場合、その授業科目の受講資格を得る。その場合、・の2科目(後学期ならば・の2科目)のうち、2科目とも履修しても良いし、どちらか一方だけを履修しても良い。

2年次以降に「卒業要件単位」を充足した上に、さらに英語科目の履修を希望する者で、既に「上級英語」の単位を2単位以上修得済みの場合は、「選択英語(上級)・・・」の中から好きな科目を必要なだけ履修できる。「選択英語(上級)・・・」は、それぞれ週1回開講され1単位の科目である。上級レベルの学生を対象にして、長期留学や資格試験に対応するためのTOEFL対策クラスを「選択英語(上級)」の一部として設置する。この科目は週4回5時限に開講され(90分授業が2回と45分授業が2回)、全ての授業に出席することが求められる。修得できる単位は、2単位である。既に「上級英語・・・」の単位を修得済みであり、各クラスで成績上位者であることが受講条件である。この科目の受講を希望する場合は、受講に関する説明を受ける必要があるため、必ず教務課に事前に申し出て指示を受けること。

また、これまでに「中級英語」の単位を2単位でも修得した実績の有る者、又は1年次に初級・基礎レベルであってもプレイスメントテストを受験し「中級英語」の受講資格を得た者は、「選択英語(中級)・・・」の中から好きな科目を必要なだけ履修できる。「選択英語(中級)・・・」は、それぞれ週1回開講され1単位の科目である。

大学の成績として記録に残すことを考えれば、最終的には「上級英語」まで履修することが理想的であろう(成績証明書には、「基礎」、「初級」、「中級」、「上級」といった習熟度を表す科目名が明記されるので、同じ単位数であっても社会的な評価は異なることに注意し、少しでも上位グレードの授業科目を履修し、単位修得できるように努力してほしい)。

もちろん、どの習熟度の授業科目を履修するにしても、着実に進歩すべく努力することが重要である。また、専攻科目が多くなる2・3・4年次になると、時間割の重複などにより履修選択が大変困難になるので、本来の配当年次・学期に必要な単位を履修するべきである。何らかの理由により、1年次において「卒業要件単位数」の8単位を履修できなかった諸君は、単位修得のできなかった不足分の単位を2年次に再度履修しなければならない。ただし、1年次に履修して単位を修得済みの科目と同一名称の科目を再度履修することはできないので注意すること。再履修が必要である場合は、プレイスメントテストを受験して新たにクラス指定を受けるか、前もって教務課において、具体的な所属クラスについての指示を受けなければならない。

< 図表 5 >

	< 履修条件 >	< 履修可能英語科目 >
1 年次 前学期	プレイスメントテスト受験 4 月オリエンテーション期間中のプレイスメントテストにより，上級～基礎レベルが指定される。各レベル内はさらに成績順にクラス分けされ，上級 a，中級 e というようにアルファベット順に指定される。	上級英語 ・ 中級英語 I・ 初級英語 ・ 基礎英語 ・
1 年次 後学期	プレイスメントテスト受験 前学期終了時（7 月）実施のプレイスメントテストにより，新たにクラス指定	上級英語 ・ 中級英語 ・ 初級英語 ・ 基礎英語 ・
2 年次以上 前/後学期	プレイスメントテスト受験 1 年次同様，前学期/後学期ともプレイスメントテストを受験 < 対象者 > 修得済み科目よりさらに上位グレード科目の受講資格を得ようとする者 これまでに何らかの理由で必要な英語科目の単位修得ができなかった者 現在基礎・初級レベルであるが，次学期に選択英語（中級）の受講資格を得ようとする者 中級英語 2 単位以上修得者 上級英語 2 単位以上を含む 8 単位修得者 上級英語 8 単位修得者	上級英語 ・ / ・ 中級英語 ・ / ・ 初級英語 ・ / ・ 基礎英語 ・ / ・ 選択英語（中級） ・ / ・ 選択英語（上級） ・ / ・ 選択英語（上級） ・ / ・ TOEFL 対策 TOEFL 対策は，スコアアップを目指す，週 4 回 5 時限開講の少人数集中授業で上級英語の 8 単位を持つ各クラスでの成績優良者が対象。（要事前相談）

B) 英語以外の外国語を履修する場合

いろいろな分野での国際交流が進むなかで、英語のほか少なくとももう1外国語の習得がますます必要となっている。それは仕事や学問といった実用的な意味でも、また個人の成長という精神的な側面でも必要である。

経営学部が開講している英語以外の外国語は、ほとんどの学生にとって初めて学ぶことになるが、新しい外国語の習得は、知的好奇心を満たすとともに、世界を見る視野をいっそう拡大し、大学における専攻分野の学習を支えるだけでなく、これまで学習してきた外国語である英語をあらためて見直す機会ともなるだろう。また、英語以外に他言語を習得することは就職活動にも有利に働くであろうし、将来の予期せぬ海外派遣や国外勤務に際しても大いに役立つことであろう。

ア) ドイツ語の場合

ドイツ語で「卒業要件単位数」の8単位を満たそうとする場合には、 $\cdot$ を同時に履修する必要がありますが、他の言語を主として履修しながらドイツ語も履修したいと考える場合には、 $\cdot$ もしくは $\cdot$ の片方だけを履修することも可能です。ドイツ語で「卒業要件単位数」を満たそうとする場合、もし英語ならびに外国語以外のクラス指定科目と重複する時は、教務課に相談し、この指定クラスを変更することができます。また、後学期にもドイツ語 $\cdot$ (翌年前学期に $\cdot$) を設けているので、後学期からドイツ語を始めることができるし、前学期 $\cdot$ もしくは $\cdot$ の片方しか履修していなかった人が、ドイツ語で「卒業要件単位数」を満たそうと考えなおし、本格的に学び始めることもできます。さらに前学期で不合格の場合、後学期で同科目の再履修をすることも可能です。

イ) フランス語の場合

フランス語で「卒業要件単位数」の8単位を満たそうとする諸君は、 $\cdot$ を同時に履修する必要があるが、他の言語を主として履修しながらフランス語も履修したいと考える諸君は、 $\cdot$ もしくは $\cdot$ の片方だけを履修することも可能である。フランス語で「卒業要件単位数」を満たそうとする場合、もし英語ならびに外国語以外のクラス指定科目と重複する場合は、教務課に相談し、この指定クラスを変更することができます。また、後学期にもフランス語 $\cdot$ (翌年前学期に $\cdot$) を設けているので、後学期からフランス語を始めることができるし、前学期 $\cdot$ もしくは $\cdot$ の片方しか履修していなかった諸君が、フランス語で「卒業要件単位数」を満たそうと考えなおし、本格的に学び始めることもできる。さらに前学期で不合格の場合、後学期で同科目の再履修をすることも可能である。

ウ) スペイン語の場合

スペイン語は2クラスを開講している。したがって、英語との並行履修が可能であり、どちらの科目でも「卒業要件単位数」の8単位を満たすことができる。もちろん1年次に「スペイン語 $\cdot$ 」, 2年次に「スペイン語 $\cdot$ 」を履修することもできる。万が一、外国語以外のクラス指定科目と重複する場合は、教務課に相談し、この指定クラスを変更することができる。また、後学期にもスペイン語 $\cdot$ (前学期に $\cdot$) を設けているので、後学期からスペイン語を始めることができるし、前学期不合格の場合、その後学期で同科目の再履修も可能である。

エ) 中国語の場合

中国語は複数のクラスを開講しています。したがって、他の言語との並行履修が可能であり、どの科目でも卒業要件単位数の8単位を満たすことができる。1年次に中国語 $\cdot$, 2年次に中国語 $\cdot$ を履修することもできます。2年次で上級中国語の履修を予定している場合は、1年次に中国語 $\cdot$ を履修する必要があります。

中国語 $\sim$ は、 $\sim$ までの数字と a・b の記号の組み合わせのペア番号でペアを表わしており、週に2回同じペア番号の講義を履修しなくてはなりません。中国語 $\cdot$ には $\cdot$ があるが、中国語 $\cdot$ は中国語 $\cdot$ を履修済みの2年次生以上対象のクラス、中国語 $\cdot$ は中国語 $\cdot$ を履修済みの2年次生以上対象のクラスです。

万が一、履修希望する科目の開講時間が外国語以外のクラス指定科目と重複する場合は、教務課に相談し、この指定クラスを変更することができます。また、後学期にも中国語 $\cdot$ (前学期に $\cdot$) を設けているので、後学期から学修を始めることができますし、前学期に不合格となってしまう場合でも、同じ年の後学期に再履修することができます。

オ) ロシア語および韓国語の場合

ロシア語 $\cdot$ ($\cdot$) および韓国語 $\cdot$ ($\cdot$) は、同じ日(曜日)に開講される。また、「ロシア語」科目については、半期ずれの同科目 $\cdot$ ($\cdot$) が開講されていないので、不合格の場合は後学期での履修ができず、次年度での再履修となる。万が一、前学期で不合格科目が出た場合、3年次への「進級要件」の単位数を考慮し、後学期では他の外国語科目を履修しておくことが推奨される。なお、「韓国語」科目については、2010年度以前入学者に適用されている「朝鮮語」科目との合同クラスで開設される場合もある。

カ) 日本語の場合

日本語は、ひとクラスの開講である。日本語 (月・火) と (水・金) は前学期に開講する。日本語 (月・火) と (水・金) は後学期に開講する。

〔履修の注意事項〕

以上の英語以外の外国語を履修する場合の注意事項を整理すれば、次のとおりである。

在学中4年間を通じて時間割の都合が付く限り、複数言語を履修することが望ましい。1年次において2外国語の履修を同時に希望する場合の例を図表6及び図表7に示す。英語を主とした履修も、それ以外の言語を主とした履修も可能であるが、同一時間帯に希望する2外国語が重複し、1年次における2言語履修ができない場合もある。ただし、履修を希望する一方の言語が、英語、中国語、スペイン語であるならば、これらについては複数クラスが開講されているので、言語履修におけるクラス変更の可能性について、教務課に問い合わせること。また、語学専用枠(図表6, 7)の中で、語学以外のクラス指定科目との重複が生じた場合のクラス変更については、教務課に相談すること。

外国語の卒業要件単位数は合計8単位である。これは1外国語で8単位という条件であるから、英語も含めたすべての外国語から1言語を選び、その1言語のみで8単位を修得しなければならない。したがって、選んだ外国語・・・は必修科目に相当する。複数外国語を履修した場合は、当然ながら8単位以上を取得することになる。その場合8単位を超えた単位数は、専攻科目の選択科目の卒業要件単位数に算入することができる。

ローマ数字の・・・は文法主体の授業で、・・・は会話や視聴覚教材にもとづく実践的学習などを中心とする授業である。したがってからまでの科目を2年かけて履修したい学生は、・・・を1年次に、・・・を2年次に履修するのが望ましい。しかし、・・・を1年次に、・・・を2年次に履修することも可能である。

各外国語・・・は週2回行われる各授業を、同一教員が担当する場合も、2人の教員が担当する場合もある。それぞれの授業の具体的な内容は各担当者により多様のため、講義計画を熟読したうえで履修することが必要である。

履修登録した科目の単位を修得できなかった場合は、その科目を再履修しなければならない。の単位(週2回2単位)を修得できなかった場合は、を登録履修することはできない。の単位(週2回2単位)を修得できなかった場合は、を登録履修することはできない。

ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語および韓国語の場合は、後学期にも・・・が開講されている(翌年の前学期に・・・が開講される)ので、前学期にだけを修得した学生は、(週2回)と(週2回)を後学期に履修し、だけを修得した学生は、(週2回)と(週2回)を履修することができる。そして、前者の場合はを、後者の場合はを、それぞれ2年次前学期に履修することになる。

後学期にも外国語学修を始めることができる。前学期に選択し一旦履修し始めた外国語を、後学期に変更して、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語および韓国語のいずれかの外国語を新たに履修し始めることは可能である。ただし、ロシア語および日本語の場合、半期ずれた授業の開講はないので、新登録や登録変更、あるいは再履修は翌年まで待たなければならない。

2年次には、選択科目として各外国語(ただし日本語を除く)の上級が開講されている。この上級を履修登録するには、当該外国語の単位を6単位以上修得していなければならない。ただし、卒業要件単位8単位に対する不足分2単位に該当する授業科目は、上級の授業と同時並行して履修することができる。また、これら上級・・・はいつでも、どれでも単独に履修することができる。

英語・中国語・スペイン語以外の各外国語は各1クラス開講である。したがって学生諸君にはクラスを選択するという自由がないので、各外国語の履修希望者は、時間割に十分配慮しなければならない。

図表6 2外国語を希望する履修モデル(英語とスペイン語の場合。またクラスE-Hは各曜日の両言語の時限を入替える)

曜日 時限	月	火	水	木	金	土
1	英語 A-D (独・仏・ 西・韓・ 中 /)				英語 E-H (独・仏・ 西・露・韓・ 中 /)	
2	(独)	英語 E-H (独・仏・ 西・露・韓・ 日・中 /)				
3	スペイン語 (英語 E-H・ 仏・韓・日・ 中 /)	(中・韓)	(独)	英語 A-D (独・仏・ 西・韓・ 中 /)	スペイン語 (英語 A-D・ 露・韓・日・ 中 /)	
4		スペイン語 (英語 A-D・ 露・中 /)	(独)	スペイン語 (英語 E-H・ 韓・中 /)	(仏)	
5			(日, 中)			

- 注1：英＝英語，独＝ドイツ語，仏＝フランス語，西＝スペイン語，中＝中国語，露＝ロシア語，韓＝韓国語，日＝日本語
- 注2：網掛けの時間枠は外国語専用枠である。この専用枠にクラス指定された他科目があっても，外国語科目が優先される。
- 注3：スペイン語にはクラス指定はない。したがって，E～Hクラスの場合はこの表の英語をスペイン語に，スペイン語を英語に読みかえること。また，スペイン語を中国語に読みかえれば，英語と中国語を並行履修する場合となる。
- 注4：「選択英語」を除く各英語科目にはクラス指定があり，A～Dクラス対象とE～Hクラス対象のものに分かれている。したがって，希望する他言語の授業と重なっている場合のみ，クラス変更について教務課に相談することができる。

図表7 3外国語を希望する履修モデル（ドイツ語またはフランス語を主とする場合）

曜日 時限	月	火	水	木	金	土
1	独・仏 (英語 A-D・西・韓・中 /)				独・仏 (英語 E-H・西・露・韓・中 /)	
2	(独)	独・仏 (英語 E-H・西・露・韓・日・中 /)				
3	スペイン語 (英語 E-H・仏・韓・日・中 /)	(中・韓)	(独)	独・仏 (英語 A-D・西・韓・中 /)	英語 A-D (西語・露・韓・日・中 /)	
4		英語 A-D (西・露・中 /)	(独)	スペイン語 (英語 E-H・韓・中 /)	(仏)	
5			(日・中)			

注：このモデル以外の外国語を希望する場合は，その言語の と の時間割を調べ，上記8つの時間枠の半分を確定した後，次に希望する言語の時間割を調べる。ある言語によっては，第二希望の言語が8単位受講できないケースも出てくるが，その場合には2年次以降での履修を薦める。

4．健康科学科目の特徴と履修

(1) 健康科学の目指すもの

学部の基本理念は，「国際人としての素養・資質を備えた人材の育成」であり，この目的を達成するために「自分で問題を発見し，考え，解決する能力を備え」，「相手の考え方を理解すると同時に，自分の考えや感情などを口頭，文書，身体で表現できる人材」の育成を主たる教育方針として設定している。

「健康科学」は，その理念に沿った科目として実施している。健康科学は適切な身体運動を媒介として，将来必要とされる心身の能力を高めることを目標にしている。身体と運動の知識と理論についての理解と認識を深め，実技などの実践を通して豊かな人間性を育成することを目指している。

近代文明が，利便性，効率性を求めすぎて，生活の中で適宜な運動量が不足している今日，将来的には自らが積極的に運動する機会を求めていかなければならない。同時にそれらを生活設計の中に位置づけていく態度と能力も必要となる。

学生時代は，一生を支配する世界観やライフスタイルを樹立する大切な時期でもある。この時期に，健康と運動に関する知的理解を深め，道徳的に正しいことを判断し，実践する精神力や豊かな心を育成することが重要である。

健康科学の講義目標は，次のとおりである。

健康・体力を保持増進する。

将来の健康管理を行う能力を身につける。

身体運動（スポーツ）を通して社会生活の縮図を体験し，社会のニーズに対応できる精神的能力を身につける。

生涯学習の一環としての社会体育への接点の役割として学ぶ。

(2) 「健康科学」の内容

健康科学

理論 健康のとらえ方 体力論 身体機能と運動能力

実技	健康診断 基礎体力の養成	体力診断 スポーツ種目を通した運動能力の養成	運動能力テスト
健康科学			
理論	体力測定の評価について 運動処方についての理論	トレーニングの理論	
実技	トレーニングの処方と実際 各種スポーツ種目の応用をととした基礎体力および運動能力の養成	適切な運動処方の実践	

(3) 講義運営および成績評価

「健康科学」の講義運営および成績評価の方法

授業には必ず「健康科学」(使用書, 指定)を持参する。

学期当初から2回, 上記の理論を講義し, その後実践的授業とする。

理論と実践を通して各自の体格・体力・運動能力を評価し, 将来に向けての運動処方を考える。

健康科学の教材は陸上, 体操, 剣道, 球技種目を採用し, トレーニングも含めた授業を展開する。

学校体育演習を設定し, 教職課程を履修している学生を対象として将来教職に就いた時の課外活動などの指導方法および管理・運営などについて学ぶ。

特学コースを設定し, 身体的疾病のため普通の授業に支障があると認められる者を対象として, 現在の体力水準に合わせた運動量を処方しながら授業を展開する。

成績評価については, 健康診断ならびに体力テストを受検し, 総授業回数の3分の2以上出席した者が評価の対象となる。健康科学は様々な評価基準が考えられるが, 実践して効果を求める観点を重視する。さらに授業態度, 教材に対する取り組みの姿勢なども考慮する。

再履修クラスを設定する。健康科学は1年次前学期・後学期に設定されているので, 不合格の場合は改めて次年度履修しなければならない。年度初めに再履修ガイダンスを受けて, 必ず担当者の指示に従うこと。

(4) 受講における注意事項

授業に出席する場合は, 運動に支障のない服装を用いること(ジーパンは厳禁)。

体育館を使用するクラスは, 体育館シューズを必ず使用すること。

病気その他の理由によって欠席または見学・早退・遅刻する場合は, あらかじめ担当者に届け出ること。また, 事後となった場合も, 速やかに届け出ること。

授業に出席した者は, 担当者に必ず出席票を提出し, 出席印を求めること。

指定されたクラスで履修すること(学部別, 男女別, 教職課程専攻の有無別(男女合同))。

健康診断についての注意

健康診断は自己の発育発達の実態を把握し理解することと, 疾病の早期発見に意義がある。また適切な運動量を処方するためには, 医学的に評価された個人および集団の健康水準をもとにしなければならない。したがって, 健康科学を履修する者は必ず受診しなければならない。

体力テストについての注意

本学は学生の体力を把握するために, 文部科学省スポーツテスト(運動能力テスト・体力診断)を実施している。各自が自己の体力について認識を深めると同時に, 授業における運動処方の参考にする。健康科学を履修する者は必ず受検しなければならない。